

裾野麗峰山の会山行報告書

文・井上 写真・後藤

山行番 NO. 1555
日時 2013.06.09 (日) 晴～霧
山域 富士山頂 (3776m)
コース 富士宮五合目発6:10—九合目9:08—頂上10:55～11:45—五合目14:25
標高差 上り 富士宮五合目約2370m～頂上3776m＝約1406m
参加者 後藤隆徳、井上弘二郎、河野光江

6:10 富士宮口駐車場をスタート。肌寒くフリースを着て出発。テレビや新聞では、来月7月には富士山が世界文化遺産になり、有料化され、年間登山者が30万人から40万人になると報道されている中、5合目の一番上の駐車場はすでにいっぱいだった。が、登山道は人がぱらぱらいる程度で、静かで無料の富士登山も今月の今回が最後かと感慨深く思う。

6:30 6合にて衣服調整。7:50 元祖7合着。この時間で下山してくる人がおり、聞けば夜中2時から登り始めたとのことだった。また、カップル2人で登っている人が多い。彼らの装備は新しくピカピカのピッケルもザックに結び付けてある。後藤さんに言わせれば、ピッケルはすぐ出せるようにザックと背中の中に差すものである。後藤さんは寝不足のためペースがゆっくりだ。

ゆっくりとはいえ、追い越して先に行くほど自分にも余裕はないので、ゆっくりついて登る。空気の薄さのため、頑張るとしんどくなる。一步踏み込んでいるときにもう片方の脚は休むという考えで登ると、楽な気持ちでいられた。河野さんは雪が苦手なので、道に雪が現れたら引き返すということにしていたが、実際には雪が現れてもむしろ楽しんでいるようだ。

8:30 8合着 (標高3290m) 南アルプスと伊豆半島の山なみが、霞の上に浮かび上がってきれいだ。9:10 9合着 (標高3460m) 腕時計の高度計を何度も見る。見ても高度が増えていかない。時間を見ればさっき見てから3分しかたっていない。もっと長い時間苦しさを感じていたつもりだった。気が付けば100m登っていた、なんてことはない。5m、10mが長い。長く感じる。それでも、ペースを変えず淡々と登ることで確実に次の山室に到着しほっとする。

9:48 9合5勺着 (標高3595m) 頂上直下直登コースを左にそれ、ブルドーザ道に入った。ここは初めてだ。雪はあるものの緩やかな傾斜で疲れにくい。ここで河野さんが先頭になりぐんぐん先に進み強さを発揮していた。ブルドーザ道を数回折れると、なんと剣ヶ峰の馬の背の入口に到着。富士宮口頂上をパスして来てしまった。得をした気分で残りの馬の背に取り組み。見ればすぐそこだが、息苦しく足元だけを見つめ歩く。前を見ても全然近づいてくれない。

10:55 剣ヶ峰着 (標高3776m) 上り4時間45分。御鉢 (火口) の中は、かつて見たこ



とがない景色が広がっていた。これまで夏に見た火口は、宇宙映画の惑星のセットのように感じ、ダイナミックさが印象的だった。それに雪がかかるとなるともきれいな風景になる。中央がくぼみ雪で真っ白、垂直の壁は茶色のままで、垂直でない上の方に雪が粉砂糖をまぶしたようにかかっている。粉砂糖をまぶした巨大なシフォンケーキみたいだった。三角点で写真を取り少し下りると、観測所跡の建屋の屋根が程よい位置にあり、靴を脱いで乗ると日光で温まっており大変心地良い。ここで昼ごはんとする。

持ってきたビールを開ける。ぬるくなっていたので雪で冷やした。パンを1つ食べたが、おなかがすいているが食欲がない。後藤さんからとれたてきゅうりを頂いた。これは甘く

おいしかった。頂上ではスキーヤーが多いのに驚く。姫路から4人グループが来ていた。その情熱に脱帽だ。御鉢の中にスキーヤーが滑降し消えていく。

カッコよく決まっている。しかし底まで滑ったら登り返さなければならず、その労力を考えるととてもまねできない。風が吹くと寒く、フリースとカップを着んだ。

11:45 下山開始 下りは正規ルートで雪渓を下る。雪が苦手な河野さんには申し訳ないが、訓練と称しぎっくぎっくと下る。時々新雪でひざまで埋まり、河野さんが悲鳴をあげる。アイゼンをつけてないので慎重になる。雪がない登山道を見つけた河野さんは、雪渓を離脱した。ガスが上がってきて見通しが悪くなってきた。

靴底をスキーのように使いグリセードで滑り、後藤さんを追いかけるが息が切れて長く続かない。途中、スキーにシールを付けて上る人を見かける。これまたすごい人だ。去年スキーを担いで登ったが、あの斜面をスキーを履いて直登する気には到底ならない。苦痛な表情をする人はいない。参りました。

雪渓をだいぶ下ってからだが、やはりアイゼンをつけることになった。夏靴に一本縛りでつけるアイゼンは初めてだ。アイゼンをつけると下りがとても楽になった。最初からつけておけばよかったと後悔した。しばらくして西へトラバースし、隣の沢にでる。ここで移動せずそのままおると宝永火口に落っこちるそうだ。クワバラ。雪がなくなり、アイゼンで歩きにくく砂地や岩に足を取られ転んだ。アイゼンを外し、一般道を下る。ようや



く酸素が濃くなって呼吸が楽になる。でも体はくたくた。6合小屋真上に出た。ラッキー。むだのないルートを下ってきたようだ。河野さんとも合流した。

14:25 駐車場着 下り2時間40分。去年は重いスキーを担いでいたが観測所まで行けず富士宮口の鳥居までしか来られなかった。この季節に頂上まで行けたのは初めてで新しい自慢の種になった。頂上の景色は広大すぎるので、行って実際に見た人にしかわからないと思う。写真や言葉ではどうしても伝えられない。いつものように、よかったことだけが記憶に残り、苦しいつらいことは忘れてしまうだろう。今回もすばらしい体験をさせていただきありがとうございました。



その他の記述（後藤）

1. 日帰り富士山頂は厳しい。改めて實川さんに敬意。
2. 下山時、小山町のトクラさんに会った。この日、730回目の登山といった。
3. この日、異常にスキーヤーが多かった。しかし、雪は最悪だったが・・・。
4. スキーヤーの中に姫路・大阪から来た方がいた。姫路パーティーには私より年齢が上に見える方がいた。頂上お釜を滑っていたが敬意・脱帽・賞賛。
5. 飲み物は甘系のものだけでなく、真水も持ってくるという。
6. 今年は昨年にくらべ雪は少なかった。
7. 下山は雪が硬かったから、アイゼンを履いたほうが良かった。
8. 例によって登山禁止の看板・バリゲート。宝永山の道も止めてあった。建前主義は無意味。
9. 頂上測候所跡屋根で休憩したが快適だった。
10. 継続は力。この時期、毎年上りたい。

以上